

十二月のテーマ

捨てる生活



え・城谷俊也

癖を捨てて 自分を磨く

Aさんは、渉外部に勤めて数年になる社員です。ある日、

職場での会話の中で、後輩への対応が軽いと上司から指摘を受けました。「話し方がぞんざいで、節度を欠く。公私の区別をつけるように」と言われたのです。

たしかにAさんは、後輩には友達と話すように話していました。自分でも気づいていましたが、それを改めようとは思っていませんでした。上司に指摘を受けて初めて、その言葉遣いが、周囲から良く思われていなかったことを知ったのです。

自分の癖を自覚したAさん。へようへと心に決めました。しかし、後輩への言葉遣いを丁寧にしようへと心に決めました。しかし、長年染み付いた癖はすぐには直りません。少し気を抜くと、「そんなの？」という友達口調が出てしまいます。

自分のミスで後輩に負担をかけたしまった時も、「悪い」の一言で済ませてしまい、言った後で、「こゝういうところがいけないのだ」と痛感しました。癖が出るたびに、

Aさんは自分を省み、気を引き締めて、努力を続けました。

三カ月ほどすると、少しずつ丁寧な言葉遣いが身についてきました。後輩と挨拶を交わす時も、以前は、すれ違いざまに「おう！」と言っていたのが、「おはよう」「おはようございます」という言葉に変わってきました。

また、先輩や同僚への挨拶にも変化が出てきました。座ったまま挨拶を返していたのが、自然と椅子から腰を上げて挨拶するようになったのです。周囲とのコミュニケーションも以前より良くなり、仕事もスムーズに進むようになってきたのです。

*

ある日のこと、Aさんは仕事の進め方について、尊敬する先輩に相談をしました。

Aさんの仕事ぶりを日頃からよく見てくれていた先輩は、「仕事の最終形を頭に描くこと、自分の世界にこもらず、周囲をよく見て、人の話をよく聞いて進めるように」と助言してくれました。そし

て一言、「A君には強情なところがあるからなあ」と言ったのです。

「強情」という言葉に、Aさんは思い当たるところがありました。たしかに自分には、頑固で強情な一面があったからです。

人の話を聞くように先輩がアドバイスしてくれたのも、我が強く、自分を変えようとしないうえを知っていたからでした。また、振り返ってみれば、後輩への雑な言葉遣いも、自己本位で、他人を軽く見るところに原因があったのです。

倫理運動を創始した丸山敏雄は著書『純粹倫理原論』の中で、「不用の信念・知識・雑念は日々これを捨てて、日進日新の心境に遊ぶ」と述べています。

上司の指摘により、自分の癖を自覚したAさん。後輩への言葉遣いを変えようと努力を続ける中で、心に頑として横たわっていた強情さが少しずつ溶けていきました。癖と向き合い、我を捨てていった時、Aさんは「爽やかに挨拶をする」新しい自分と出会うことができたのです。